

平成30年度

郡山市福祉の心を育成する作文コンクール

優秀作品集



郡山市

「平成三十年度郡山市福祉の心を育成する作文コンクール」は、市内の小・中・高校生のみなさんが障がい者に対する理解を深め、福祉の心を育てることを目的に実施しております。

今回御応募いただいた作品は、自ら体験し感じたことをもとに、障がいをお持ちの方に対する自分自身の考え方を見つめ直したもののや、障がい者にとって暮らしやすい社会のあり方を考察したものなど、素晴らしいものばかりでありました。すべての作品から、人を思いやる優しさや障がい者への素直な気持ちを感じられました。コンクールに応募いただいたみなさん、作品をお寄せいただきまして本当にありがとうございます。

今回のコンクールには、小学生の部一六六点、中学生の部一六三点、高校生の部十五点、計二九四点の作品の応募をいただきました。

この作品集には、厳正な審査により選考された最優秀賞二作品、優秀賞十作品及び佳作十二作品を掲載しております。この作品集を通じて、より多くの方々が、障がい者について理解と関心を深められ、また、障がい者福祉を考えるきっかけにいただければ幸いです。

結びに、コンクールの実施にあたり、児童・生徒のみなさんを御指導いただいた先生方、また、審査員並びに御協力いただきました関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成三十年十一月

郡山市長 品川 萬里

もくじ

■あいさつ

■もくじ

■作品

【最優秀賞】

安心してね、おじいちゃん	郡山市立開成小学校	五年	橘内俊樹	4
母のヘルプマーク	郡山ザベリオ学園中学校	二年	阿部夢	6

【優秀賞】

みんなで持たい福祉の心	郡山市立安積第二小学校	六年	遊佐歩乃佳	10
わたしが障がい者について考えること	郡山市立薫小学校	六年	廣木真優	12
ぼくのこだわりと家ぞく	郡山市立大槻小学校	五年	熊田雄斗	14
障害ってなに	郡山市立大島小学校	五年	矢部海花	16
マイペースこれが早姫ちゃん	郡山市立日和田中学校	三年	迎田翔太	18
ポッチャ教室に参加して	郡山市立郡山第一中学校	一年	大原あい	20
心のバリアを取り除いて	郡山市立郡山第一中学校	二年	橘内祐奈	22
知ること	郡山ザベリオ学園中学校	三年	白江琉華	24
勇気	福島県立郡山萌世高等学校	三年	穴戸沙弥香	26
障がい者について	福島県立郡山萌世高等学校	三年	橋本健	27

【佳作】

大切な弟	郡山市立永盛小学校	四年	大越晴琉	30
障がいを持った人	郡山市立芳山小学校	六年	三島木夢	32
車いすバスケットを通して	郡山市立桑野小学校	四年	岡田優理	33
今のぼくにできること	郡山市立大成小学校	六年	大河原慶祐	35
差別のない世界	郡山市立熱海中学校	三年	栗城愛美	37
暮らしやすい街にするために	郡山市立郡山第一中学校	二年	市村麻結	39
明るい未来のために私達ができること	郡山市立郡山第一中学校	二年	久保木桜子	41
不自由ない生活を送るために	郡山市立郡山第三中学校	二年	佐藤叶夢	43
将来、僕が願うこと	郡山市立緑ヶ丘中学校	二年	豊田暁久	45
ユニファイド	郡山市立緑ヶ丘中学校	二年	古川真貴	47
障がい者について考えること	福島県立郡山萌世高等学校	二年	菅野蓮美	49
みんなが平等である世界に	福島県立郡山萌世高等学校	二年	高橋瑠奈	51

■講評

..... 54

■作文応募状況

..... 56

■実施要項

..... 57

【最優秀賞】

安心してね、おじいちゃん

ぼくには、大好きなおじいちゃんがいます。おじいちゃん
は、つりが得意で、ぼくをよくつりに連れて行ってくれます。
でも、今年の四月に突然、おじいちゃんの右半身に麻ひが起
こり、右手や右足がうまく動かせなくなってしまいました。
おじいちゃんは、どんどん元気がなくなってしまい、ぼくは
とても悲しく思っていました。

そんなとき、東京にいるおじさんが、専門の病院を探して
くれました。東京の病院へ初めて受診に行くとき、ぼくはお
じいちゃんが心配だったので、ぼくでも何か役に立てるかも
と思い、無理を言っっていっしょに連れて行ってもらうことに
しました。

ぼくはこのとき、駅や新幹線、街の中で様々なことに気付
きました。普通に歩くのも辛そうなおじいちゃんは、段差や
階段、エスカレーターは危険だということ。エレベーターも、
すぐには見つけれないし、数も少ないこと。また、新幹線
の乗降口からずいぶん歩かないと乗れないことなどです。い
つも、エレベーターを使わないぼくは、足の不自由な人など

郡山市立開成小学校 五年 橋内 俊樹

体に障害を持っている人やお年寄りが、駅の中を移動するだ
けで、こんなに大変な思いをしていると初めて知りました。
また、上野駅の改札を通るときには、大勢の人が早足で歩
くので、おじいちゃんは改札をなかなか通れません。それを見
たおじさんが、窓口の所から改札を通りたいと駅員さんに話
しましたが、おじいちゃんの様子を簡単には伝えることがで
きず、少し迷惑そうな顔をされました。ぼくは、悲しい気持
ちになり、体の具合が悪いことを見てすぐにわかるようにで
きれば良いのにとずっと考えていました。

ぼくは、家に帰って何か良い方法があるか調べてみました。
すると、「ヘルプマーク」というものがあることがわかりま
した。ヘルプマークとは、東京で始まり、そこから全国に広
がったものです。目に見えないけど体に病気や障害を持って
いる人が、周りの人に手助けや配りよをしてもらいやすくす
るためのマークだそうです。ぼくは今まで関心がなかったこ
ともありますが、ヘルプマークを付けている人や、それを広
めるための活動を見たことがありますでした。調べる中で

よくわからないことがあったので、郡山市の障がい福祉課に電話してヘルプマークについて聞いてみることにしました。電話では、担当の安藤さんが詳しく教えてくれました。どのような普及活動をしているか聞くと、今は、公共施設にポスターを貼ったり、窓口で紹介して配布したりしているということでした。平成二十七年に導入してほしいと市民から要望があり平成二十九年九月から、郡山市でも配布するようになったということでした。郡山市では、平成三十年七月末までに九百五十一個が配布されたそうです。小学生のぼくでも、家族のためにもらえるか聞いてみると、書類を書かなくても、おじいちゃんの体の具合を話せばもらえるということでした。

ぼくは、その日に市役所へ行き、ヘルプマークをもらうことができました。おじいちゃんに、早速話をして、ヘルプマークを渡すと、

「こんなマークがあるんだなあ。今度はこれを付けて出かけてみるよ。ありがとう。」

と言ってもらえました。ぼくは、おじいちゃんがこれを付けて、少しでも安心して出かけてくれると良いなと思いました。ぼくでも少し役に立ったのかなと、うれしくなりました。

安藤さんが、「今後は民間の施設にもポスターを掲示して広めていきたい」とおっしゃっていたので、早く実現すれば

良いなと思いました。ぼくは、これからヘルプマークを付けている人がいたら、助けてあげたいし、みんなにヘルプマークのことを伝えていきたいなと思います。そして、配りよや援助が必要な人に、少しずつでも優しく手を差し伸べることが出来る社会になれば良いなと思います。

母のヘルプマーク

夏休みが近づいたある日、学校から帰ると、テーブルの上に、見たことのない赤いタグのようなものがあった。

「これは何。」と母に聞くと、それは『ヘルプマーク』だと教えてくれた。調べてみると、障害者手帳を持っていたり目に見える障がいではないけれど、日常生活や災害時に、援助や配慮を必要としていることを知らせることで、周りから援助を得やすくするためのマークだった。ヘルプマークは、赤地に、白色で十字マークとハートが描かれている。

私の母は、今の私と同じ十四歳の時に、慢性腎不全と診断され、今も毎日の薬の内服は欠かせず、運動や食事の制限がある。そして、とうとう透析になる時が近づいてきた。今の母は、とても疲れやすく、どんなに休んでも体のだるさが取れない。母は、

「透析になることは怖くないし、今まで二十五年間も腎臓が何とか働いてくれたことがありがたい。」

と言っていた。そして、

「妊娠が分かった時、三軒の産婦人科から、出産は無理、と

郡山ザベリオ学園中学校 二年 阿部 夢

言われたのに夢を無事に産めたこと、これ以上に幸せなことはない。どんなに透析になる時期が早くなると、夢を産むことを選んだ。」と笑って言った。

夏休みに、母と関西へ旅行に行った。透析導入前に、自由に出かけられる最後かもしれない。透析目前の今、母は、長く歩いたり、ずっと立っていたりするのが、もうとてもつらくなってきた。その母が、市役所で受け取ってきたのが、あのヘルプマークだった。

新幹線など指定席がとれるものは確実に座れるが、途中の移動の電車やバスなど、席が空いていない時に困ることがある。目に見える障がいがあるわけではないし、見た目には普通に元気な人に見える。だから、席を譲ってもらったり声をかけられたりすることはない。しかし、この夏、ヘルプマークを付けて電車に乗り、吊革につかまっていたら、母の目の前に座っていた女性が、母のヘルプマークに気付いて、席を譲ってくれた。母はお礼を言い、席に座らせてもらった。母

も、譲ってくれた女性も、にっこり微笑みながら。隣で見ていた私まで、とても嬉しい気持ちになった。

母のように外見からわからない障がいや病気があって、疲れやすかったり、立ってられない方が、優先席に座っていても、このヘルプマークを付けていることで、何らかの事情があることを、視覚的に伝えることもできる。そして、ヘルプマークの裏面に、病名や連絡先、必要な支援内容を書いておくことで、緊急時にも適切な処置を受けられる可能性がある。

まだまだヘルプマークは、知られていない。実際、私も母のヘルプマークを見るまで、あることすら知らなかった。私の住む福島県では、まだ一つの市のみでしか配布していない。しかし、東京などでは、地下鉄の各駅でヘルプマークを受け取れたり、周知のためのポスターが貼ってあるそうだ。

私は、母がヘルプマークを持ったおかげで、もしヘルプマークを持った人がいたら、外見からはわからなくても、体調がすぐれないのかもしれない、何か助けて欲しいことがあるのかもしれない、と気付くことができる。知らない人に声をかけるのは、とても勇気がいるが、私のほんの少しの勇気と優しさで、助かる人がいて、誰かの役に立つことができる。席を譲ることだけではなく、困っている人に声をかけて、何か手助けできることがあるかもしれない。

だから私は、もしヘルプマークを見かけたら、勇気を出して、こう声をかけようと思う。
「私に何かお手伝いできることはありますか。」と。



【優秀賞】

みんなで持ちたい福祉の心

郡山市立安積第二小学校 六年 遊佐 歩乃佳

今年の夏、わたしは前歯をおりました。その結果、前歯を絶対使ってはいけないという不便な生活が始まりました。

前歯を使ってはいけないので、おにぎり、ハンバーガー、焼き肉、当たり前食べていたものが急に食べられなくなり、ました。好きなものを食べられないから、せつかく楽しい食事の時間がいっしょに楽しくなくなり、悲しかったです。不便になったら、食べることも苦になりました。

当たり前が当たり前じゃなくなるって、悲しいし、大変で、落ち込むんだなと思いました。

道徳や国語で、目の見えない人や耳の聞こえない人など、体の不自由な人の勉強をしたことがあります。駅で、耳が聞こえない人が電車を待っていて、アナウンスが入り、他の人たちは別なホームに移動したけど、耳が聞こえない人はわけがわからずあせっている絵を見ました。その時、先生が、「皆さんなら、どうしますか。」

と聞きました。声をかけてみるとか、ジェスチャーで伝えてみるとか、いろんな意見ができました。先生は、

「耳の聞こえない人は、ノートや鉛筆を持っているから、書いて伝えることもできるんですよ。」と教えてくれました。

わたしは、その授業をした時は、正直、見て見ぬふりをしてしまうかなと、思っていました。でも、自分が不便な生活をしてみて、自分ができないことを人がやってくれと、ありがたいし、みんなが気を遣ってくれると意外とうれしいということを知りました。自分も障がいのある人の役に立つことをやりたいなと思いました。

わたしが、見て見ぬふりをしようと思ったのは、余計なお世話かな、変なことをして逆に迷惑をかけちゃうかなと思っただけです。でも、不便な生活をしている人は、やってくれたり、助けてもらったりすると、一人じゃないって感じて、気持ちが楽になるんじゃないかなと思います。それは、わたしがそうだったからです。

歯をおってから、初めて学校に行ったとき、先生がみんなにそのことを伝えてくれると、いつもは教室で元気に遊んで

いる友達が、わたしの近くでは、静かにしてくれたり、給食の時に、大きなお肉が出ると、

「大丈夫。歯を使わないようにしようね。」

と声をかけてくれたりしました。自分のことじゃないのに、自分のことみたいに接してくれたのがうれしかったです。バレーボールの仲間は、わたしがコートに入れなくなって迷惑をかけてしまったのに、いやな顔ひとつせず、いつも気にかけてくれました。何気ない気遣いが、落ち込んでいたわたしの心を温かくしてくれました。

もし、みんながわたしに無関心だったら、一人で落ち込んでいたと思います。

「障がいのある人に出会ったとき、皆さんならどうしますか。」

先生の質問に、今ならこう答えます。

「無関心で終わらない。」

困っていきそうな時は、自分からはたらきかける。何をしてもいいかわからない時は、

「何かお手伝いできることはありませんか。」

と聞いてみる。それで、もし断られても、相手に関心を持ったという思いやりは伝わったと考えればいいのです。

「障がいは、不便だけど、不幸ではない。」

という言葉も勉強しました。不幸を作り出してしまふのは、

人間の心です。逆に、どんな立場や生活だったとしても、幸せを作ることができるのは、人間の心です。できる人ができない人にちよっとした思いやりを持つことで、お互いに幸せは作り出すことができます。どんな個性や特性に関わらず、誰もが幸せを感じられる心のバリアフリーが大きく広がるようなそんな世の中になるといいです。

わたしが障がい者について考えること

郡山市立薫小学校 六年 廣木 真優

私は、障がい者の人たちや、障がいをもっている人たちの暮らしを考えたことがありませんでした。障がい者になっただけでもないし、身近に障がい者がいないので、私には関係ないと思っていました。でも、今年の六月に、ユニバーサルランの活動で、又吉選手などが学校に来て、義足の体験をしました。それから、障がい者に対する気持ちが変わりました。

又吉選手は、陸上の百メートルでパラリンピックを目指している選手です。体験ではまず、義足を持つたり、しくみを学んだりしました。又吉選手がはいていたのは、日常用でした。スポーツ用になると、日常用とはちがい、少し曲がって、バネが入っているそうです。バネがあることで、速く走るることができます。さらに、義足の人のための、足首が曲がっていて、私の足と変わらないような歩き方ができるロボット義足があるそうです。これを聞いて、「義足の人が、私達と変わりのないように歩けるしくみがこんなにあるなんて知らなかった。」と、とても感心しました。また、義足をは

める体験では、少しの段差があっただけでも、つまずいて、転んでしまいそうになりました。

「こんなに小さな段差でも、つまずくなんて。義足をはいて歩くことって、こんなに難しいんだ。」

とみんな話していました。また、

「おふるは片足で入ります。」

と言っていたので、その夜、片足でおふるに入ろうとしましたが、手すりをつかんでみても着地ができず、「私の家って、義足の人が住みにくい家だなあ。」と思いました。この体験で又吉選手が、

「かわいそうだと思わないでください。」

と言っていました。私はこの言葉を聞いて、又吉選手にとっては、義足の生活がふつうの生活なんだ。だから、かわいそうと思ってほしくないんだなあと思いました。義足だからかわいそうなんだ、義足だから不便なんだろうなあと思うんじゃないかと、私達といっしょなんだと考えてほしいのが分かりました。

ていくといいと思います。

また、六年生の道徳では、こんな勉強をしました。「Aさんは、音が聞こえません。駅で電車を待っていたら、『お急ぎの方は、向かいのホームへ移動してください』というアナウンスが鳴りました。あなたならどうしますか。」というものです。クラスでは、めんどくさいから「ほっておく。」という意見もありました。でもそれは、困っているのが分かっているのに助けてくれないということになりひどいことだと思います。そういった考えがあると、障がい者も安心した暮らしができなくなるのではないかと私は思います。なので私は、「助けてい。」と思います。でも、耳が聞こえない人にどうやって声をかけたらいいかわかりません。なので駅では、けい示板にその情報を流すなど、目で見て分かるようにするべきだと思います。これなら、手話ができなくても、けい示板を指すことでわかってもらえると思います。その他に、目の見えない人のために、私達ができることは、点字ブロックの上を歩いたり、自転車を止めたりしないことです。小さなことかもしれませんが、簡単にできます。

障がい者のことを考えることは大切ですが、それだけ特別あつかいするわけではなく、だれでも困っていたら、思いやりの気持ちで、手をさしのべられるような社会になっるといいなと思います。もしかしたら、そういう社会になっているのかもしれませんが、でも、それが、もっとよりよくなっ

ぼくのこだわりと家ぞく

郡山市立大槻小学校 五年 熊田 雄斗

ぼくは、お父さんとお母さんから、発たつしようにいがあると教えられています。こだわりがあること、大きな音が苦手なこと、人が多い所が苦手なこと、などがあるようです。ぼくも、大きくなるにつれて、自分の苦手なことが少しずつ分かるようになってきました。

でも、ぼくの苦手なことは、家ぞくのことを困らせているんじゃないかと気になる時があります。たとえば、大きな音の出る花火大会に行けなかったり、こんでいるテーマパークに行けなかったり、がまんさせちゃっているのかなと心ばいになります。

そんな心ばいしているぼくに、お父さんとお母さんは、「がまんしていないから、だいじょうぶ。協力してるだけだから、気にしないでいいよ。もし、雄斗のクラスに、そういうお友だちがいたら協力してあげてね。」

と、言ってくれました。それを聞いて、ぼくの心が安心したらしく、なぜか泣いてしまいました。

それから、ぼくも何か家ぞくのために協力できることはないかなと思い、一生けんめい考えました。ちょう子の良い時は、家のお手伝いをしようと考えました。ぼくは、布団しきがとくいなので、おもに布団しきを手伝っています。そのほかにも片付けなど、今はいろんなお手伝いに、ちょうせんしようと思っています。

お父さんとお母さんは、少しの手伝いでも、

「ありがとう。助かったよ。」
とか、

「おつかれさま。」
と、言ってくれます。そう言われるのが嬉しくてたまらなくて、しぜん笑顔になります。ぼくの笑顔は、なぜか家ぞくを嬉しい気持ちにさせるらしく、また嬉しくなります。

ぼくは、発たつしようにいだけど、大好きな家ぞくを笑顔にしてあげられるんだ。こんな嬉しい気持ちになるんだ。と思ったら、学校でも役に立つ時もあるのかなと思いはじめま

した。

夏休みが終わって、二がっきがはじまったら、学校で先生やお友だちの手助けになることを、たくさんやってみようと思います。そして、みんなが笑顔になってくれれば良いなと思います。

障害ってなに

郡山市立大島小学校 五年 矢部 海花

カメハメハ大王の像の前で、両親の友人の「あっちゃん」と待ち合わせをしました。私たちは旅行先だったので、待ち合わせ場所に着くのがちょっとおくらせてしまったのですが、あっちゃんは先についていて、バスからおりた私たちを、「大丈夫だった？混んでなかった？」と笑顔で出むかえてくれました。そして、像の前で家族写真をとってくれたり、道案内をして観光地に連れて行ってくれたり、とても親切でした。私は両親から聞いていなかったのですが、あっちゃんは足が不自由で、電動の車いすに乗っていました。でも後ろにたくさんのバッグをぶら下げて、ゆっゆっとうと私たちの前を進むあっちゃんのすがたに、私が今まで持っていた「障害者」のイメージがまた変わりました。私はちょっと前まで、「障害者」は私たちが手助けしたり、力を貸してあげたり、自分より弱い立場で「かわいそうな人」なのだと思っていました。でもあっちゃんはハワイで一人で生活をしながらしゅ味でサーフィンを楽しんだり、とても行動力があって、み力的な女性でした。両親があっちゃんに会う前にあっちゃんが車い

すに乗っていると聞わなかった理由が分かりました。足が不自由で車いすに乗っているけど、それはあっちゃんの一部の特ちょうで、背が高い人、低い人、やせてる人、太ってる人、いろんな人がいるように、彼女の個性なんだと思います。そして、あっちゃんを紹介するのに「障害者」という言葉は必要なかったのだと思いました。

私が大好きな本に「レーナマリア」という本があります。彼女は生まれつき両うでとかた足に障害があったのですが、学校もふつうの学校にかよい、スイミングではリレーの選手に選ばれるほどのがんばりやでした。ある時男の子に「おい一本足、元気そうだな。」とからかわれた時に、レーナマリアは「ありがとう、二本足。あなたも元気そうね。」と答えたのでした。私はこの考え方が大好きです。私たちが見たら障害だと思っけていても本人にとっては障害ではなく、自分の特ちょうの一つだと考えているんだと思いました。あっちゃんもレーナマリアも私たちと同じなんだと思います。

私は、それまで障害者は弱い立場だから、やさしく親切に

しなければいけないと思っていただけ、障害はその人の持ちようであって「かわいそう」だから助けるのではないと思います。障害があるからではなく周りで困ってる人がいたらそれに気づくこと、自分になにができるか考えること、そして声をかけることが大切なんだと思います。そこに障害者「だから」とか「には」という言葉はいららないんだと思います。

私は障害をもった人への、心のかき根を作らない大人になりたいと思います。

マイペースこれが早姫ちゃん

郡山市立日和田中学校 三年 迎田 翔太

毎年恒例となつたいとこの帰省。この時期はお盆が来たなあ、早姫ちゃんが来るなあ…と感じながら過ごしています。僕にとつては、年の離れた妹のようないところ、早姫ちゃん。早姫ちゃんは先天性のダウン症です。早姫ちゃんが生まれてから僕は毎年この作文を書いています。いつかこれが早姫ちゃんの成長の記録として読んでもらえたらいいなあと思います。また、障害を持つ人への自分の考えや接し方を立ち止まって考えるいい機会だとも思っています。

三歳半の早姫ちゃんは、まだ言葉を発することはできません。おむつもしています。もちろん体も小さいです。でも僕は、最初にだっこした時、重くなったなあと感じました。驚いたのは一緒にボールで遊んでいた時です。僕や弟が交わす言葉が分かっていたり、

「早姫ちゃん行くよ。」
などと早姫ちゃんに声をかけると、ちゃんと言っている事が分かっていて、

「んー、あー。」

という声ではありますが反応していたので、話したいという気持ちがあり、相手の言葉もきちんと理解しているのだと思います。心の中はみんなと同じ三歳半なんだなあと思いました。

それから、食事の時も前回と比べて、自分でできるようになってきたなあと感じながら一緒に食べました。自分のスプーンやフォークを使い、反対の手でお皿を持って食べていました。スプーンをかじって注意されていました。その姿を見て僕も小さい時こんなことがあったのかなあと、自分と重ねてしまいました。自分ですくったご飯は、うまく口には運べないことが多かったようですが、それでも自分で食べようとスプーンを離しませんでした。水筒の口が開けられないと、僕のところに持ってきて、

「あー、あー。」
と、指さします。僕が悩んでいると早姫ちゃんママが、
「開けてって言うてるんだよ。」
と、教えてくれて、僕が水筒を開けてあげると、早姫ちゃん

はゴクゴクとのどを鳴らして飲んでいました。

早姫ちゃんと同じ年齢の周りの子は、きつともっと一人でできることが多くて、話すこともできるのかもしれない。でも、早姫ちゃんは早姫ちゃんのペースでゆっくりだけれど確実にできることを増やしています。自分のペースで大きくなる早姫ちゃんを、周りがしっかり受け止め、関わっていくことが早姫ちゃんの成長を伸ばしていくのかなと思います。早姫ちゃんにあった関わり方の一つに、僕は、言葉と同時に、表情やジェスチャーも言葉と同じくらい大切な表現方法なのだと感じました。言葉をうまく言えないから、相手の動きや顔の表情、声のボリュームなどをよく見聞きして感じ取っているように見えました。

三歳半のいとこ、ダウン症の早姫ちゃんに僕は負けているかもしれない。「相手の表情で気持ちを感じ取る」という僕にはできないことが早姫ちゃんにはできるからです。

来年のお盆、早姫ちゃんのマイペースもスピードを上げていくかもしれないです。楽しみにしているよ、早姫ちゃん。

ボッチャ教室に参加して

障がいを持った方が通う生活介護事業所で今年の夏休みもボランティアをさせてもらいました。今回は、パラリンピックの正式種目にもなっているボッチャ教室に利用者の方と一緒に参加しました。初めて聞いた競技だったので、どのように対戦するのか、とても楽しみでした。

ボッチャは、ヨーロッパで生まれた障がいを持つ方のために考案されたスポーツです。ジャックボール（目標球）と呼ばれる白いボールに、赤・青それぞれ六球ずつのボールを投げたり、転がしたり、他のボールに当てたりして、いかに近づけるかを競います。手で投げるのでできない選手は、アシスタントのサポートを受けながら、「ランプ」と呼ばれる投球補助具を使ってボールを転がすことができます。雨どいのような形をしています。私が参加した時は三人ずつの団体戦で初心者の中でも気軽に楽しくプレーすることが出来ました。しかし、思ったよりも難しく奥が深いスポーツです。相手より自分のボールを近づければ勝利できるシンプルなるルールで、将棋やオセロのように先々の戦略や投げる順番も

郡山市立郡山第一中学校 一年 大原 あい

勝利の秘訣です。頭脳戦のチームプレーが楽しかったです。参加者の多くの方が車椅子に乗り、手が不自由でしたが、自力の投球が不可能でもアシスタントや用具の力をつまく使い、狙い通りに投球できることにとても驚きました。雨どいのような形をしたランプを使うときは、

「もっと右、もっと左、角度をつけて。」

と、細かく具体的に指示を出していました。アシスタントの聞き取る力や相手を分かつととする姿勢がとても印象的でした。投球者の的確な指示とアシスタントのサポートでありにも正確な投球が続き、

「おお、すごい。」

と、声が出ました。たくさん拍手も起こり、笑顔もたくさん見られました。感動や悔しさを共有できて良かったです。参加者同士がお互いに出来ないことをサポートしながらプレーする姿を見て、このような思いやりのある社会に前進して欲しいと感じました。

ボッチャは、障がい者スポーツとしてだけでなく、「一般

のスポーツ」としても普及を目指しているそうです。企業の研修やレクリエーションとしてボッチャをするケースが増えていくと教えてもらい、とてもいいことだと思いました。障がい者スポーツとして特別視するわけではなく、誰もが普通に一緒にスポーツを楽しめることが理想です。ボッチャがもっと普及し、日頃からたくさんの人と、もっと交流できる機会が増えれば、一緒に楽しみながら心のバリアフリーの意識を高めることが出来ると思いました。

参加者の中には、交通事故や病気で身体が不自由になっただ方もいました。障がいの程度や状況は様々で、誰もがいつまでも健康でいられるとは限りません。障がいのあるないにとられず、一人の人間として相手の立場に立って考えてみる大切だと思いました。どんな人も社会の中で共に生きる仲間であり、ボッチャは障がいの垣根を越えて共に楽しめるスポーツです。障がいのある人が怖いなどの偏見や差別、特別な存在だと考える意識がバリアになってしまいます。普段の生活の中でも相手の立場に立って接することは難しいことが多いです。良かれと思ってしたことでもそれが相手の望むことだとは限りません。その時に大切なのはやはりコミュニケーションです。障がいのある方と接していなければ、コミュニケーションの取り方も分かりません。相手の思いを受け止めることが出来なければボッチャのアシスタントと

して勝利をつかみ取ることも出来ないと思いました。ボッチャ教室に参加し、心のバリアフリーについて考えるきっかけになりました。相手の立場に立って接することから始めていきたいです。

心のバリアを取り除いて

私は、小学四年生のとき、左足を骨折したことがある。保健の先生と整形外科へ行って診てもらうと、足が治るまで松葉杖を使わなければならないと言われた。松葉杖は扱つのがとても難しく、歩くだけでも大変だった。氷の上に雪が積もっていることがわからずに歩き、転んでしまつて、とても痛い思いをしたこともあった。

学校生活も、それまでとは大きく変わってしまった。登下校は母に車で送ってもらい、学校の中でも様々な所で先生や友達に手伝ってもらわなければならなくなった。

私は、松葉杖で生活する中で、身の回りにたくさん障害があることに気付いた。

一つ目は、階段や段差だ。階段は、松葉杖を使って歩くのは、想像以上に大変で、一階から二階に上がっただけで、右足はパンパンになった。足を踏み外さないように、一段一段気をつけて歩かなければならず、とても時間がかかった。しかし、階段よりも気を付けなければならなかったのが、少しの段差だ。普段何気なく歩いていた場所だが、ほんのわずか

郡山市立郡山第一中学校 二年 橋内 祐奈

な段差につまづいて転びそうになったこともあった。二つ目は、トイレだ。シューズからスリッパに履き替えるのに手間取ってしまう、とても大変だったことを覚えている。また、松葉杖を持って入るには、個室のスペースは狭いことにも気付いた。

他にも、十分な広さがあるように思えた廊下も、荷物や給食の配膳台があり、すれ違うときに周りの人に迷惑をかけるような、気を付けて歩かなければならなかった。

このように、松葉杖の生活は、とても不自由だった。しかし、この生活も、友達や先生方、家族からたくさん支えてもらったからこそ、乗り越えることができた。友達には、休み時間や授業中、ずっと付き添って側にいてくれ、何かあるとすぐに手助けしてくれた。両親は、仕事で忙しい中、毎朝教室まで送ってくれた。下校時は、両親に代わって祖父母が迎えに来てくれた。先生方は、階段の上り下りのときにいつも手を貸してくださった。さらに、医師から、「このままでは右足も疲労骨折してしまうかもしれない」と言われたときには、

学校で車いすを準備していただいたり、先生が私を背負って階段を移動してくださったりもした。

私は、これらの体験を通して、これまで気付かなかった身の回りの障害に気付いたり、たくさんの方の思いやりを感じたりすることができた。それまで、私はエレベーターやスロープなどを取り付けたり、使いやすい物を開発したりすることがバリアフリーだと思っていた。でも、このときに私がしてもらったような相手の立場に寄り添って必要に応じた手助けをしてあげることも、大切な「心の」バリアフリーではないかと思うようになった。

それ以降、様々な場面や場所で松葉杖や車いすの人を見かけるようになった。スローパーでは、思いの外狭い通路で、他のお客様とすれ違うとき、大変そうに移動する人。松葉杖で買い物をして、松葉杖に買い物袋を提げて歩く人。そういった人達を見て、声を掛けようと思ったことが何度あったが、なかなかできずにいた。

しかし、先日、近所のスローパーで、棚の上の方にある野菜をなかなか取れないでいる車いすの人を見掛けた。私は、勇気を出して声を掛け、取ってあげた。その人は、嬉しそうに顔でお礼を言ってくれた。思い切った声を掛けて良かったと、私の気持ちもとても晴れやかだった。このとき私は、お互いが「心のバリア」を取り除き、手助けしたり、お互いを理解

したりすることが、みんなが気持ちよく過ごせる「心のバリアフリー」なのだろうと思った。これから、私は困っている人を見かけたら、勇気を出して声を掛けていこうと思う。心のバリアを取り除いて。

知ること

私の姉は重度の自閉症という障害を持っている。普段の生活ではあまりなじみのない話かもしれないが、この事実によって私の意見は、構成されているのだと思う。ほとんどの人がこの障害について知らないだろう。実際私でさえもよく分からないことのほうが多い。しかし、「分かる」と「知る」は違うものだ。私は多くの人に、この障害について知ってもらいたい。

自閉症という障害は、自閉症スペクトラムの中の一つである。私の姉の場合は人とコミュニケーションをとることが苦手で、たくさんの方のサポートが必要となる。今のところ治る見込みはないらしいが、千人に一人の確率で自閉症の人がいるといわれている。

私はその確率を初めて耳にしたとき、何十億人の人たちが生活しているこの現代社会において、非常に大きい確率だと感じた。それと同時に、障害を持っている人はたくさんいるはずなのにどうして障害について知っている人は少ないのだろうかという疑問を持った。私の母は社会福祉士になりたいと

郡山ザベリオ学園中学校 三年 白江 琉華

思っていた時期があり、自閉症のことについて知識があったため、周りのサポートも受けながら姉を育ててきた。けれど誰しもがそうではない。自分の子供が自閉症であったとき、知っている人と知らない人とは、少しだとしても差はでてくるのではないだろうか。自分たちだけでなく皆が知っていれば、障害を持って生活している人たちの環境が良くなっていくのではないかと。

私は小学生の頃からずっと考えていたことがある。それは普通とは何なのか、ということだ。障害のことについて話すと必ず言われるのが「変な人」や「普通じゃない人」だった。私はそれを聞いたとき腹が立って仕方がなかったのを覚えている。普通という言葉はよく使われている言葉でなじみのある言葉だけれど、その言葉の意味について少なくとも私は理解したことは一度もない。普通じゃないといっても、普通にごはんを食べる。普通に寝る。普通に動く。少し苦手なことが多いだけだ。誰にだって苦手なことはあるのだから、そう考えると誰もが普通じゃないことになる。私は自閉症だけ

のことではなく、障害を持った人に対して「普通じゃない」という言葉で片づけるのではなく、理解をして知ろうとすることが大切だと思う。常識にとらわれるのではなく、広い視野をもち、自分で考えて行動することを大事にしていきたいと思った。

しかし、全員がこの行動にできるかといったら、そうではないのだと思う。人には人それぞれの感じ方があり、絶対に正しい答えなどは存在しない。私が今までのべていたこれらの意見もしよせんは綺麗事だと感じる人もいるだろう。近くに障害を持った人がいるから言えることだと思う人もいるだろう。私ももし、自分の姉が自閉症でなかったら、障害を持っている人への感じ方もまた変わっていただろう。自分とは違うことに怖いと感じていたかもしれない。だからこそ、わかる人が伝えていかなければならないのだ。

私は障害を持っている人たちの大変さや必要なことを知り、受け入れて生活をするだけで、変わることはたくさんあると思う。悩み、苦勞しているたくさんの人たちに寄りそって支えていくことができる社会をつくる、障害について知ることはそのための第一歩なのだ。

勇気

福島県立郡山萌世高等学校 三年 穴戸 沙弥香

「何かお手伝いしますか。」

困っている人が目の前にいたのに、その一言を言葉にすることができませんでした。

先日、街を歩いていた視覚障がい者の方が一定の場所を歩き来していました。その少し先の点字ブロックの上で高校生たちが話をしていたのです。会話に夢中になっていて背後の人の気配にも気づかなかったのでしよう。私は、視覚障がいのある人への声のかけ方などはインターネットなどで少し勉強していたのですが、その時は、一歩踏み出すことができませんでした。

もし、困っていたのが聴覚障がい者の方だったら。私は、中学生の頃から手話の勉強をしています。手話で「お手伝いしますか」「何」と「お手伝い」という二つの手話だけで伝わります。しかし、先日のように躊躇してしまうのではないかと、話しかけに行けるのかと考えてしまいます。

ですが、困っているお年寄りに声をかけた時、お手伝いを必要とする人はどうしてほしいと、必要としない人は大丈夫

と返してくれます。それは障がいがある人も一緒です。あたりまえの事ですが、相手がお手伝いを必要とするかしないかを判断するのは私ではありません。せっかく手話を学んだり、視覚障がいがある人とのコミュニケーションの取り方を勉強したので、少しの勇気を出して困っている人、どんな障がいがある人でも「お手伝いしますか」の一声をかけていきたいと思えます。

障がい者について

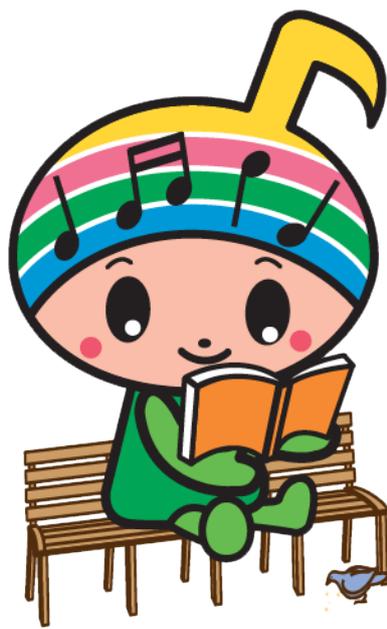
まず障がい者とは、身体的・精神的に障がいを持つ人に分けられます。そして私自身も精神疾患で施設に入居していたことがあります。そのため障がい者の方と触れ合う機会が多く、その中で感じたことや考えたことを書き綴りたいと思います。

では始めに身体障がいを持つ人と関わってみて感じたことですが、とても活力のある方が多いという印象でした。それは何故なのか私自身の考えですが、身体に障がいがある分、日常生活で不便なことも多々あると思います。ただそれでも出来る限り一人で行ってみようという意識が強い為なのではないかと考えます。

次に精神障がいを持つ人についてですが、私自身もそうだったのですが人や環境に大きく左右されるという印象でした。精神に障がいがある人は常に心が晴れない状態、そのように感じました。これは私自身の経験と実際に精神障がい者の方と関わってみて感じたことです。他に精神障がい者の方と関わってみて感じたことは、信頼してる人や、ものがある

かどうかで大きく変わるといえることです。心の病気は非常にデリケートな問題で、簡単に悪化することはあっても、急に良くなるということは稀なのです。ただそこで何かしらの信頼できるものがあれば、良い方向に向かっていくのではないかと考えます。

そして最後に今回この作文を通して考えたことは、まだまだ障がい者にとって不便なこと不自由なことは多いと思います。そんな中で障がいを持ちながら逞しく生きている人を尊敬し誇りにも思います。そして「障害者」という表記が「障がい者」となったように、害のない環境づくりが大事だと思ったのと同時に、当たり前ですが皆が協力し助け合う、そのような社会環境をつくっていくことが大事だと改めて感じました。一人一人に出来ることは少ないかもしれませんが、意識して行動を起こすことで救われる障がい者の方がいるかもしれません。私は、障がい者の為のボランティアに以前から興味があったので、今後障がい者ボランティアに積極的に参加したいと考えました。



【佳作】

大切な弟

郡山市立永盛小学校 四年 大越 晴琉

ぼくの弟は、耳がぼくたちより聞こえません。最初は家族のみんな弟の耳が悪いということが分からなくて、なかなかしゃべったりしないので、へんだなと思っていました。いろいろな耳のけんさをして耳が悪いことがわかりました。いろいろな声や音などが聞こえるように両耳にほちよう器をつけることになりました。ぼくもためしにほちよう器をつけてみると、すごい音が耳にひびいてすごいうるさく感じました。こんなにいるさいのをつけて弟は本当に大丈夫かと心配になりましたが弟には大丈夫そうでした。

弟のことを初めて見る人は、弟のほちよう器のことを「何つけてんの」などと聞いてきたり、弟は、まだ赤ちゃん言葉しかしゃべれなかったの、「あーあー」とか言う、「何しゃべってるの」と聞いてきたり、ひどい時は、わらって見に行ったり、おもしろがっていました。それを見てぼくは、なんでもわらったり、おもしろがったりするんだらうと、とてもかなしかったです。でも、だんだん弟のことをわかってきてくれて、わらったりおもしろがったりしなくなって弟としゃべろ

うとしたり、一しよに遊んでくれたり、やさしくしてくれるようになりました。それを見てぼくはうれしかったし、弟もうれしそうでした。いまでは、ぼくのサッカーチームの人気者です。

弟は、耳が聞こえない子が行くようち園に行っています。ようち園では、先生が手話を教えてくれます。ぼくは、手話があることを知り、ぼくもおぼえようと思いました。まずぼくは、家族のみんなで指文字をおぼえました。指文字は、にてるものがあるし、形は同じでも向きがちがうのがいっぱいあって指文字をおぼえるのがむずかしかったです。でも、弟もがんばっておぼえようとしていたので、ぼくたち家族も、あいうえおから順番におぼえました。今では、あ行から全部おぼえることができます。弟はようち園でほとんど手話をおぼえてくるので、ぼくもおぼえるのがたいへんだけど、しっかりおぼえて弟としゃべれるようにがんばりたいです。弟と話す時は、大きな声でゆっくり話します。あと大事なことは、目を見て話すことです。そうすれば弟によくつたわ

るようになりす。弟がいることによつて指文字・手話をおぼえることができたし、耳が聞こえない人にはどうすればいいのかを知ることができました。耳が聞こえない弟だけでなく、ぼくは弟のことが大すきです。弟がいてくれて、毎日がすごく楽しいです。これからも弟を守つてあげたいし、耳が聞こえない人がいたら助けてあげれるようになりたいです。

障がいを持った人

私のお父さんとお母さんは福祉関係の仕事をしています。障がいを持った人のお手伝いをする仕事です。お父さんとお母さんがそんな仕事をしているので、私にとっても障がいを持った人は身近な存在でした。

ある日、お父さんにさそわれお父さんの仕事場のし設で開かれたお祭りに行きました。お祭りに出ていたお店の中には、障がいを持った人が働いてるお店もありました。大変な仕事なのにしっかり任された仕事をしている姿を見てすごいと思いました。

また障がいをもった人が楽しめるように、お手伝いをしてる人達を見てすごいと思いました。障がいを持った人をとっても思っていて、どうしたら行動しやすいかなど考えていたり、困っている時に助けるなどしていました。人のことを考える優しさにすごいと思いました。

実は私には二才年下の発達障がいを持った弟がいます。弟がくらしやすい様に家族で協力して色々な工夫をしました。たとえば、弟が服をしまっていた収納ケースにどこに何

郡山市立芳山小学校 六年 三島木 夢

が入っているか分かる様にズボンが入っている所にズボンの絵とズボンと書いたカードをはったり、一日の予定が分かりやすくなるために一日の予定をカードにしてボードにはり一日の予定が一目で確認できる様にする工夫をしました。絵で分かりやすくとするという工夫はお父さんの働いているし設でもされていました。この様な工夫が障がいを持っている人がくらしやすい社会になるための一歩だと思いました。障がいを持った人がくらしやすい社会になるためには障がいを持った人の事を思う心が必要です。思う心があれば「こつした方が楽だろうな」などと考える事もできると思うからです。障がいを持った人を思って考えられた工夫が広まって障がいを持った人がくらしやすい社会になることができるように私も協力できればいいなと思います。

車いすバスケットを通して

郡山市立桑野小学校 四年 岡田 優理

私が車いすバスケットボールに行くようになったきっかけは、お父さんです。お父さんが車いすバスケットに参加していたので、

「私も行きたい！」

と、おもしろそうだったので連れていってもらいました。

初めて車いすバスケットの練習に行ったときは、とてもおどろきました。おもしろそうと思ったのは、行くまでだけで、実さいに見ていると、車いすは、あたり前かもしれないですが、手だけで動かすからです。しかも、車いすを動かすだけではなく、車いすに乗りながら、ドリブルをしたり、シュートをしたりするからです。時には、車いす同士がぶつかって、転んでしまうこともあります。そんな時は、一人では起きあがることのできないので、同じ車いすの人や、足が動く人、みんなが協力して起きあがるのです。一つ一つがとても大変なことになりました。

そこで、車いすバスケットの人に、生活をしていて大変なことがないのか聞いてみました。すると、ある人は、

「だんさがあるところは通りにくいんだよ。階段は登るのがむずかしいね。」

と話してくれました。私は、自分の家の周りを考えてみました。家の周りには、そここうがあり、それはガタガタして、ふむたびにだんさになることを思い出しました。車いすは動かしにくいだろうなと思いました。また、私が通う学校には階段があり、車いすでは登ることができないとも思いました。車いすで生活する人にとっては、私があたり前に通っている道もあたり前に通っている学校もあたり前ではないのです。

練習の合間に、車いすに乗せてもらいました。最初はとても楽しくて、ぐいぐい車を回しました。でもすぐにうでがいたくなりました。うでだけで動かすと、あまりつかわないうきん肉なので、力が入らなくなり、動かすのも大変でした。また、とまる時は、わきのレバーをひきます。何回もやっていたので手の皮がむけてしまいました。

少し乗っただけでもうでがいたくなったり、皮がむけたり

してしまうのに、毎日乗っていたら、もしだんさがあつたら、とても大変なことなんだと思いました。

「大変な時はどうするんですか。」
そう聞いてみると、

「そういう時は、まわりの人に相談するよ。それに、こまった時は、知らない人も声をかけてくれて助けてくれるんだよ。」

と教えてもらいました。その言葉で、私にもできることがあるかもしれないと感じました。私にできることは、こまっている人がいたら、はずかしがらずに手をかしてあげることです。

最後にこんなことも話していました。

「しょうがい者やお年よりも住みやすい、やさしい町にしてほしいな。」

私は車いすバスケットを通して、自分にとってあたり前のことが、あたり前ではない人がいること、こまっている人がいたら手をかす勇気をもつことが大切なことがわかりました。そして、しょう来、いろいろな人を助ける人になりたい、そう思うようになりました。

今のぼくはどのくらい

ぼくが低学年のころ、テレビを見ていた時、話をしている人のとなりで、手や指を動かしている人の姿を見ました。不思議に思ったぼくは、母に、

「手を動かしているけど、何をしているの。」

と聞くと、母は手話だと教えてくれました。手話とは、耳がよく聞こえない人や言葉が上手に発音できない人などが会話をする時に音声を使わないで、手の形や体の動きなどで言葉を伝え合う方法だと説明してくれました。手話の中には、ひらがなやカタカナ、アルファベットや数字を一つ一つの文字で表す『指文字』もあることを知りました。

手話に興味を持ったぼくは手話の本を買ってもらい、指文字のポスターをかべにはり、以前から手話に関心を持っていた母といっしょに覚え始めました。まず始めは、指文字から覚えることにしました。あ行から一文字ずつ指文字のポスターを見ながら指の形を作り、母と確認しながら進めていきました。形が似ているものがあり覚えることが難しく、迷ってしまう指文字もありましたが、覚えた指文字を使って自分

郡山市立大成小学校 六年 大河原 慶祐

の名前を表しながら練習していきました。指文字覚えに苦戦したのは、母でした。関心のあった母ですが、全ての指文字がなかなか覚えられず、やっと覚えても二日過ぎると忘れてしまい、身に付けることが難しいようでした。手話も同様でした。形や動きからイメージされる手話があり、意味を考えながら覚えると、簡単なあいさつなどは指文字よりも早く覚えることができましたが、いつの間にか使わないうちに忘れてしまいました。

六年生になった今、久しぶりに指文字ポスターを見てみました。全部覚えたつもりでいましたが、忘れてしまった指文字がたくさんあることに気が付き、がっかりしました。そこでぼくは思い付きました。ひらがなやカタカナ、漢字を習うように小学校の授業の中で道徳や総合学習の時間に少しずつ学んで覚えていけば良いのでは…。一度にまとめて覚えたり、大人になってから学ぶよりも小さいころから少しずつ覚えていけば、くり返し練習することで身に付くのではないかと考えました。みんな覚えていけば、手話がもっと身近な

ことになり、だれかが忘れた場合でも他のだれかが対応できるはずです。指文字だけでも考えは伝えることができるので、みんなができる社会になった時、手話で生活をしている人達が今よりももっと楽に社会生活が送れるようになると思っただからです。

平昌。パラリンピックをテレビで見ている時、様々な障害を持つ人が参加していて、その障害の重さの程度によって細かくクラス分けがされていることを知りました。体を思うように動かすことができない障害を持つ人に出会った時、困っていたとしても力が弱いぼくが、手を貸してもあまり役には立てません。そんなぼくでも、指文字や手話を身に付けておけば、役に立っている時があるかもしれません。その時のためにぼくはまた指文字や手話を覚え直そうと思いました。

障害は、見た目だけでは分からないこともあります。そうした人達が周囲の人に配りよを必要としていることを知らせる『ヘルプマーク』があることを知りました。郡山市では昨年からの配布を開始し、マークのふきゆうに取り組んでいるそうです。ぼくは、ヘルプマークを身に付けている人をまだ見たことはありませんが、このマークの意味を知らない人もいると思います。みんなが意味を分からなければヘルプマークも役に立ちません。これも学校の授業で取り上げてプリントを配布するなど、みんなに知ってもらう工夫が必要だと思

います。

町中で困っている人に声をかけることは、今のぼくには勇気がいります。けれども自分にできることから始めていきます。

差別のない世界

郡山市立熱海中学校 三年 栗城 愛美

「私たちは、健常者と同じ暮らしをしている。」「ハンディキャップは持っているけれど、それ以外は全く健常者と一緒だと思う。」と障がいをもった方々がテレビのインタビュアーで語っていたのを目にしました。

この言葉を聞いた時、私たちはきっと無意識の中で、「障がい者」というワードだけで普通の人たちではないと決めつけているのではないだろうかと思うようになりました。よく考えれば、障がいの原因となる部分を取り除けば、私たち健常者と何一つ変わらないということなのです。例えば、仕事の場面で細かい作業が難しい人がいた場合、他の人がサポートしてあげたり、かわりにその人ができる仕事と交換してあげたり、協力し合いながら支え合うことで、難しいと思える仕事を進めることができます。これは健常者同士でも言えることです。しかし、障がいをもっているからできないだろうと決めつけて、初めから難しい仕事をやらせないというのは問題です。もしかしたら、その人はできるかもしれないし、少しだけ力を貸してあげることのできることもあるからです。だからやらせないのではなく、見守ってあげながら困っ

ている時にサポートをすることが大切だと思います。仮に、決めつけてしまったせいで、「私には出来ないから、まわりに迷惑をかけるな」とマイナスなイメージを与えてしまった、その人が落ち込んでしまったらとても悲しいです。

そのようにならないためにも、相手の気持ちを理解しようとするのが大事とても大事なことです。そうしたら、きっとお互いにもっと信頼が生まれ、「あの仕事（作業）もやってみたい」と、自分から積極的に声をあげてくれるかもしれない。そして、私も何か力になれることがたくさん増えるかもしれないのです。

私の兄はADHDという広汎性発達障がいをかかえています。見た目は健常者の私と同じですが、学習機能が低く、他の人とは違った行動をとることもあります。違うことがたくさんあります。しかし、漢字の読み書きができなくても、お友達と話したり、自分から積極的に行動したりして仲良く過ごすことができます。しかし、広汎性発達障がいの兄は障がい者手帳を見せなければ気づいてもらえないこともあります。とても寂しいことです。

とても大切なことだと考えます。

私は、今年の夏、総合の授業で福祉体験学習を行いました。そこで、おじいさんやおばあさんと接するうえで三つのことを学びました。一つは相手の顔を見ること。二つ目は、ゆっくりと話すこと。そして三つ目は、笑顔で接することです。この福祉体験で学んだことは障がい者手帳を持っている人と接するときもとても大切になってくると思います。

私は、兄のように自分から積極的に人と関わる方ではないのですが、努力しこの三つのことを実践して、より多くの障がいをもった方々とふれ合っていきたいです。

最近では、障がい者スポーツと言われるパラスポーツ、二年後に開催される東京パラリンピックといった大きな大会があります。多くの選手が活躍している。パラスポーツですが、メディアで広くもっと取り上げてほしいと思います。ハンディキャップを抱えていても、とてもすごいこと、素晴らしいことができるんだと多くの健常者の皆さんに知ってほしいと心から願っています。

私がおぞむこと。それは、「障がい」という言葉がなくなるような日本に、世界になってほしいということ。障がいをもった人たちに、ハンディキャップをもってもここまでできるんだと自信をもってほしいということ。そして、健常者の私たちがこのような人たちに対して偏見をなくすことが、障がいをもったひとと健常者が仲良く生きていくために

暮らしやすい街にするために

郡山市立郡山第一中学校 二年 市村 麻結

この世界には、障がいを持っている人、いわゆる障がい者がたくさんいます。障がい者とは、身体障害・知的障害・精神障害(発達障害を含む)その他の心身の機能の障害があり、障害および社会的障壁によって継続的に日常生活や社会生活に相当な制限を受ける状態にある人のことです。ちなみに、「障害者」を「障がい者」と表すのは、「害」という字を使うのは、障がいのある方を傷つけるのではという考えがあるからだそうです。そこで、私は障がい者がよりよい生活を送るためにどうすればいいかを考えました。

一つ目は、障害を理解することです。障害にはさまざまな種類があり、同じ障害でもその人ごとに症状や程度はちがいます。視覚障害や聴覚障害の他にも、体が不自由な人、他の人のペースについていけない人、外見からは障害があるかどうか分かりにくい人、心が不安定な人など、障害は一つ一つちがいます。そんな障害を少しでも理解してあげられれば、障がい者の人たちは、よりよい生活が少しでもできるのではないかと思います。

二つ目は、サポートをするということです。たとえば、目の見えない人に道を聞かれた場合、目の見える人に対して言うときのように、「あそこ」「あの」「あれ」「これ」などの言葉を使つては、目の見えない人には分かりません。目の見えない人と話す場合には、「ここから○番目の道を曲がって…」や、「横断歩道をわたって…」など、具体的に、分かりやすく説明し、サポートしてあげる必要があると思いました。

三つ目は、差別をなくすことです。必ず、障がい者の人を差別する人がいます。私たちも障がい者の人たちも同じ人間だし、なぜ、自分がやられていやなことを人にできるんだろうと思いました。障がい者の人を差別することは、絶対にしてはいけないことだと思いました。もし、障がい者の人を差別してしまつたら、すごく悲しくていやな気持ちになるし、見ているこっちまでいやな気持ちになります。なので、絶対、障がい者の人に差別をしてはいけないし、優しい気持ちをもつことが大切だと思いました。

四つ目は、公共の場についてです。例えば、トイレは多目

的トイレ、階段には手すりやスロープ、駅のホームなどには点字があります。多目的トイレなどは、だれでも自由に使えますが、ずっと使っていてはいけません。公共の場にいるときは、障がい者の人用のスペースは、障がい者の人がいつでも使えるよう、障がい者の人が優先的に使った方がいいと思います。

このように、私たちが障がい者の人に対してできることはまだまだあります。自分たちが大人になって、障がい者の人と一緒に活動することになったとき、どのようなサポートができるかを考えなければいけません。そして、今から、外に出かけたときに、障がい者の人が困っていたりしたときには、積極的にサポートしたり、声をかけたりして、障がい者の人たちがよりよい生活ができ、楽しく暮らせる街にしていきたいなと思いました。

明るい未来のために私達ができること

郡山市立郡山第一中学校 二年 久保木 桜子

みなさんは『小児麻痺』という病気を知っていますか。この病気はポリオウイルスに感染したり、産まれる前、産まれた時に頭にケガや病気をもっていたり、または産まれるのが早かったり、産まれた時に体が小さかったりすると、かかっ
てしまい、手足が麻痺する恐ろしい病気です。一九八一年以降は予防ワクチンによってこのウイルスによる小児麻痺は発生していませんが、もし発症すると完治は難しい病気です。
私の祖父は、幼い頃にこの病気にかかりました。その後遺症で、現在も片足が動きません。そのため、家の中では両手を使い、体を支えて移動しています。外出する時は、どこに行くにも松葉杖が欠かせません。加えて、高齢者の祖父は松葉杖に頼っていても、その歩き方はフラフラして危なっかし
く、私たち家族はいつも不安です。

私の祖父母は福島市に住んでいます。そこには信夫山という場所があり、私たちはお盆頃にそこへお墓参りに行きます。しかし、そこは車を降りてから、お墓へ行くのにとっても急な坂を下っていかなくてはなりません。私は手すりを使って下

ることが出来るのですが、二本の松葉杖を両手で使う祖父は、手すりをつかめないのです。ただただゆっくり、家族につきそわれて下っていくことしか出来ないのです。その姿を見て、私は、改めてバリアフリーな世の中とは何かを、考えてみようと思いました。

まず私は、自分の身の回りの色々な所に目を向けて、どんな工夫があるのかを探しました。すると、大きな道路がたくさんあり、目立つ場所にある建物等には、体が不自由な人やお年寄りのためのスロープがあったり、車イスをおいていた
り、駐車場に専用のスペースが準備されていたり、随分便利で安全になっていると感じました。しかしその一方で、車
あまり通らないような細い道が多い所に行くと、ゴツゴツして石だらけで、私でもつまずいてしまいそうな舗装されてい
ない道や、街灯がないので夜になると足下が見えないほど真っ暗になってしまふような道も見つけることができま
した。

こうしてみると、日本には改善しなくてはいけない場所が

まだまだたくさんあるのだと分かりました。

勿論、最近の社会は昔よりずっと福祉に力を入れていきます。それは今回調べる以前から感じてはいました。それでも、車の通りが少ないような所に行くのと体の不自由な人やお年寄りには危険な道が驚くほどたくさんありました。

では、バリアフリーの世の中にするためにはどうすれば良いでしょうか。私はバリアフリーの問題にしっかり向き合えば良いと思います。体の不自由な人やお年寄りの方々とふれあう事で私は福祉とは何か、バリアフリーの世の中にするために私達が少しでも力になる事は出来ないのだろうかと考えることができました。そうする事で普段は気付けないような事に気付く事が出来るのではないのでしょうか。

私には夢があります。祖父母や家族と一緒に色々な所に遊びに行きたいのです。しかし、足の不自由な祖父は、行ける所も楽しめる場所も限られていて、気軽に散歩をすることも難しいのです。

全ての人のとって安心して安全で便利な社会になるためには、たくさんのお金と時間が必要です。すぐに実現できるような問題ではありません。しかし、私達の考え方次第で、日本は変えられると思っています。例えば募金をしたり、ボランティアに参加したり、というような、社会問題について自分なりに考えられるような行動をする事で未来は今より、

もっと素晴らしいものになると信じています。

不自由ない生活を送るために

僕は『手話サークル「こおりやま」』に通っています。そこで手話を習い、実際に手話で聴覚障害者の方々と会話しています。

僕が手話を勉強し始めたきっかけは、映画『聲の形』を観たからです。この映画の内容は、石田（健聴者の男子）の小学校に転校してきた西宮（聴覚障害者の女子）が石田のいき過ぎた探究心（いじめ）に苦しみ、転校してしまい、石田は、立場が逆転しいじめの的となってしまいます。高校生になった石田は手話を覚え、西宮に謝りに行きます。健聴者とコミュニケーションをとりたかった西宮はー。というものです。この映画を観て、言語の違いから聴覚障害者と健聴者には「壁」があることを知りました。それで手話を覚えようと思いました。

始めた当初は動画や本のみで覚えています。

しかし、動画や本では自分の手話が伝わるのかがわからないと思います。そこで、父に相談したところ『手話サークル「こおりやま」』があるらしい。行ってみたい。」と言わ

れました。僕は人見知りなので不安でしたが、父も付き合ってくれることになったので行ってみました。

手話サークル「こおりやま」の主な会場である総合福祉センターの五階に着くと小学校の同級生のお父さんが座っていました。話によると、会社の同僚の方が聴覚障害者で、その方と会話する時に筆談でなく手話で話してみたいということでした。同じ健聴者で手話を勉強していても、理由はさまざまなことになりました。

僕は、より手話を理解するためにテレビ番組「みんなの手話」も見始めました。この番組では、ろう（聴覚障害者をろう者ともいう）文化を知るコーナーがあり、聴覚障害者の苦労が少しずつ見えてきました。例をあげると障害があることを発見されにくい、災害時の放送が聞こえない、生まれつき聞こえない人は上手に発声できなく電話ができない、などさまざまな苦労をしていることがわかりました。音が聞こえないことは自分が思っていた以上に厳しいことを知りました。このことは健聴者がサポートする他に解決策が無いと思

います。例えば、筆談やLINEの文字などで状況を教えてあげる、電話を代わりにしてあげる等が挙げられます。聴覚障害者は、「わからない」が一番怖いと聞きました。災害時にいち早く困っている人を助けてあげられるようにしたいと感じました。

僕は、最近まで「聴覚障害者」に関心がありませんでした。ですが、『聲の形』を観て聴覚障害者や手話を知り、「福祉」を考えるようになりました。そこから人見知りの僕が手話サークル「こおりやま」に通い、健聴者はもちろん、聴覚障害者の方々とも交流できるようになりました。ここまで自分を精神的にも成長させてくれた「福祉」をこれからも尊重し続けることが大切だと思います。

聴覚障害者のみならず、視覚障害者や身体障害者、身近な方でいうとお年寄り、みんなが福祉の力で不自由のない生活を送ることが福祉の最終目標だと思います。そのためには、社会全体で多くの不自由がある方々を支えることが必要です。

将来、僕が願うこと

郡山市立緑ヶ丘中学校 二年 豊田 暁久

僕の将来の夢は医者です。理由は、僕のおじいちゃんがまだ治りよう法の見つからない病気になってしまったからです。

そこで僕は職業体験で病院に行くことにしました。そこで、看護士さんと楽しそうに会話する障がい者の方をたくさん見てきました。僕はそこに行くまでは、障がい者の方などが、人が少し苦手でした。しかし、話していくうちに笑顔になっていく人を見てみると、なんだかバカらしく思えてきました。何で相手のことも知らないで、勝手に嫌っていたんだらうかと、今までの自分の考えが、不思議に思えてきました。それからは、障害者の方に話しかけられたときは、積極的に笑顔で答えられるようになりました。そして、障害者の方をバカにする友達が多いなか、このような経験をしたことによって、「あの人、大丈夫かな」と心配するようになりました。

前まで障害者の方が苦手だった自分から見ると、バカにしている人には、「障害者だから、変な行動をしているから、バカにする。」といった人が多いのではないかと考えています。実際、学校で障害者の子が、変な声をあげたり、手で遊

んでいると、周りの子が笑っていたり、何かをこそこそ話しているところが多く見られます。わざとやっているわけではないのにみんなから笑われていて、少し悲しく思います。そこでいくつか対策を考えました。

一つ目は、障害者の子と、もっとふれあう、です。僕たちは、障害者について何も知らない人がほとんどだと思います。そこで、休み時間など、友達と遊ぶとき、まげてあげたりすればいいと思います。そうすれば、障害者の子が困っているときに、手を差し伸べてあげられる、そんなクラスになればいいと思います。

二つ目は、テレビを見る、です。これは、どんな番組でもいいわけではなく、NHKでよくやっている、障害者に関する番組です。一つ目で言ったとおり、障害者について、何も知らない人が多いと思ったので、こういう番組を積極的に見て、理解を深めればいいと思います。そうすれば、障害者のことをバカにしたり、笑ったりしないと思います。

こういったことだけでなく、環境も大事ではないのかと考えるました。僕が、こうあればいいんじゃないか、と思ったこ

とがいくつかあります。

一つ目は、家の前に、「障害者が暮らしています」と書かれたシールをはれば良いと思います。最近、台風や大雨などの自然災害が多いです。そういった場面で避なんしなければならぬとき、近所の人が、家まで助けにいける、そんなものを作れば良いと思います。また、同じように、高齢者シールも作れば、高齢者の存在にも気づけます。

二つ目はAIのロボットです。この技術が発展すれば、例えば、手と足が不自由な人は脳内で思ったことをロボットがしてくれる、こんなことができれば良いと思います。しかし、悪用されてしまうのは困るので、〇〇さんだけに反応する、みたいな機能があれば良いと思います。他にも、話すことができなくなってしまった人には、話したいことを思い浮かべると、ロボットが代わりに話してくれる、こんなのがあってもいいと思います。こんなロボットが障害者全員に配られたらいいなと思います。

僕はおじいちゃんの病気をきっかけに、医者を目指すことにしました。そのために行った職業体験で、とても大事なことに気づかされました。それは、他人を尊重することです。どこにでもあるようなありふれた言葉ですが、障害者の人はなりたくてなったわけではありません。それをバカにしたり、笑ったりするのは、他人を尊重できていないのではないで

しょうか。いつか、誰もが楽しく暮らせるような日が来ることを願っています。

ユニファイド

私には、障がい者の兄がいますが、今まで障がいについてあまり意識しませんでした。

今年、兄が障がい者の日本代表として大会に出場しました。その事をきっかけに、もう一度障害について考えてみました。

私の兄はサッカー選手です。今年の七月、アメリカのシカゴで、国際的なサッカー大会としては初めて「二〇一八年スペシャルオリンピックピックス ユニファイドフットボールカップ・シカゴ」が開催されました。

ユニファイドスポーツとは、知的障がいのあるアスリートと知的障がいの無いパートナーでチームを作り、練習や試合を行い、スポーツを通じてお互いに相手の個性を理解し、支えあう関係を築いていく取り組みです。

日本ではあまり知られていないスペシャルオリンピックピックスですが、私は小さい頃から兄の応援で博多や新潟で行われた大会に参加していました。いつもは兄の応援でファミリーとして参加していますが、この活動が多くボランティアスタッフに支えられていることを目の当たりにし、私もボラン

ティアとしても参加してみたいと思いました。

今回のシカゴ大会でも沢山の人が関わっていたようです。そこで色々な人が障害や、ユニファイドについての話をしていました。

「世界でこういう自由な発想で自由に楽しんでいる場所があることを感じてもらえたら、きっと日本の中でも関わり方とか社会の中でどうサポートすればいいか感じるものがあると思う。」と応援歌を作ってくれたGLAYのテルさんが言っていました。今回の事をきっかけに色々な人に考えてみてほしいと感じました。

また、福島での練習にも参加してくれた元サッカー日本代表の北澤豪さんは、

「ユニファイドの意味は共生社会の実現をフィールドでどう表現できるか。大事なのは社会にどう落とし込んでいくかという事をみんなと一緒に取り組むとお互い住みやすい日本や世界になるのかなと思う。」と言いました。確かに誰もが住みやすい世界にするためには私自身も思っていること

をどう社会に伝えていくかを考えなければならぬと感じました。関わり方にしても放っておかれたら誰も一人では生きていけないけれど、障害があるからといって過保護にするのもプライドを奪ってしまうことになるかもしれないという難しいものもあります。

兄はサッカーでパートナーからパスをもらいシュートした時よりも自分がアシストしてシュートが決まった時の方が嬉しかったと言っていました。いつもは手助けをしてもらっている兄が自分も誰かの役に立ったんだと感じたからだと思います。北澤さんの言う共生社会とはこのようにお互いを支えあうことなのではないでしょうか。四年ほど前からサッカーのボランティアに参加している方に兄達とのサッカーを通して感じたことを聞いてみました。すると

「特に障がい者サッカーだからといって気にするところはなく、最初からフラットな気持ちで入っていききました。確かに戦略面など伝え方が難しいという点はあるですが、サッカーというツールを通して交流しているという感じがします。自分達がサッカーをするときには、敵チームと勝敗のために戦いますが、障がい者サッカーでは、試合が終わった後に相手チームと仲間のようにならなくて一緒にいる姿を見ると心からサッカーを楽しんでいるように感じます。」と言っていました。私はサッカーの事はあまりわかりませんが、兄達

の一生懸命で純粋な姿を見ると多くの事に気づき笑顔になります。

今回、この大会に出て兄も私も学ぶことが沢山ありました。私も架け橋となり、障害について理解してもらったために、世界中に発信していきたいと改めて感じました。

障がい者について考えること

福島県立郡山萌世高等学校 二年 菅野 蓮美

私は、障がい者について考えることがいくつもある。

私には、障がい者の友達がいる。その友達は生まれつき体が不自由で車イスで生活している。学校ではエレベーターを使い、放課後は障がい者施設で活動している。また、体の不自由さや脳の発達の遅れなどから通常クラスに追いつけていないこともあり普段は特別支援学級で活動していた。授業の間の休憩になるとその友達の所に行きよく話していた。会うたびに少しのことでもよく笑い、でも、勉強でできないことがあると悔しいせいなのか泣くこともあった。また、その学級でも運動する授業がある。やはり、体が不自由なため他の生徒と比べてできる運動も限られてしまう。だから、限られている中でも車イスから下り地面で腕をきいてうつぶせになりながら進むという運動をしていた。私は、その運動している姿を幼い頃から見たいため今の友達の姿を見ると幼い頃より動けるようになったし、力もついてきたと感じる。また、その友達は部活でパソコンをしていた。周りと比べてやるスピードは遅いけれどパソコンの技術はパソコンをさ

わっただけの人より多くの技術を知っていたのでとても感心した。

私は、体の不自由な人でも喜びを感じたり、葛藤を抱いたりする様々な感情を持っていると思う。裏を返せば、誰もが言われて嫌なことは障がい者であっても傷つくことには変わらないということだ。このようなことを知らずに、体の不自由な人だからという理由だけで差別をしたり悪口を言ったりする人がいる。実際に私の周りにもそんな人がいた。昔と比べて障がい者に対しての配慮はされているはずだがまだまだ足りないと思う。日常生活での交通面や施設のバリアフリーなどの設置はもちろんだが、精神面での配慮をもっとすべきだと思う。さきほど言った通り、私の周りの人で差別をしたり悪口を言ったりする人がいたが、私はそんなことをしたり、言ったりしている人を見てると自分のことのように心が痛かった。その時も本人に伝わらないようにしたり、言ったりしている人に注意をした。このように障がい者にするということは、障がい者のことを知らないということだ。

だから、若い世代から少しでも障がい者のことを知っていただくと思う。そして、障がい者は自分たちと変わらない人間なのだと口頭から自覚すべきだと思う。

みんなが平等である世界に

私は、障害者という言葉が新聞やニュースなどで度々目にします。あなたはもし誰かに障害者とはどのような人と聞かれたら何と答えますか。私がこの質問をされたら正直、

「体が不自由な人、目が見えない人や耳が聞こえない人とどう接すればいいかわからない。」

などとマイナスのイメージが出てきます。このような考えを持つ人は少なからずいると思います。しかし、このような障害者と関わるのがないから自分勝手に想像をして偏見という最低なことをしていると心の中で思うようになりました。

まず、障害者にもいろんな種類があり大きく三つに分けると精神障害、知的障害、身体障害があります。精神障害に関しては、誰でもかかってしまう病気の一つだそうですねです。私も障害者について調べるまでは知りませんでした。そう、誰かが自ら障害者について学ぼうとしたり知ろうと少しでも障害者の身になり考えることが大切で、このよ

うなことをする人が増えると少しずつ障害者に対しての偏見は無くなっていくと思います。

私は中学の時、授業の中で障害者を体験する機会がありました。目にゴーグルを体全体に障害者を体験できる器具、耳には耳栓を付け、三階から一階を上り下りしました。すると、いつも当たり前のように見ていた景色はガラッと変わり、動きにくく隣に補助の人が居なければ絶対けがをしてしまいます。逆に、補助の立場になってみると相手の体を支えるため力が必要になるうえ、分かりやすく大きい声で話す声掛けも大切だと知らされました。私が見ていた障害者の世界はとても狭く、どれほど自分が豊かで恵まれているか、もっと体を大切にし、この授業や経験したことを生かしてすすんでボランティアに参加したいと思えます。人は体験し学んだり経験すると変わろうと努力します。そのきっかけをくれたのはやはり学校であり、私も中学や今の本校で授業を受けたことにより障害者に対しての目線が変わるきっかけになりました。そのため、もっと小学校、

福島県立郡山萌世高等学校 二年 高橋 瑠奈

中学校、高校とすすんでそのような授業の時間を作るべきだと私は思いました。

私は、障害者の人は普通に生活できる人より繊細で何でも感じる事ができ、人一倍の優しさと強さを持っている人だと思えます。私達は彼らに学ぶ事の方が多いはずですからこそ、自ら寄りそい手をとりあって偏見などない世界にしていこうと思えます。たった一人の行動や言動で救われる人はこの世界にどれだけいるか数知れません。逆に、障害者の方々の努力している姿や言葉を聞き、変わろうとする人も出てくるはずです。私は、両者を尊重し合い人として成長できる世界にしていいため、日本が中心になることを願っています。今の私達は、自分の生活を当たり前と思わず誰にでも感謝し、周りで助けを求めている人や困っている人を見かけたらまず声を掛けて手を差しのべてください。その行動が当たり前になるだけでこの日本はもっと素晴らしい国になっていくはずですよ。



講評

郡山市教育委員会学校教育推進課 指導主事 佐藤崇史

平成三十年度の「郡山市福祉の心を育成する作文コンクール」に、小・中・高校生の皆さんから多数の作品が寄せられました。障がいのある人との触れ合いや見聞をまとめた作品には、障がいに対する個人の考えだけでなく、社会の課題等が書かれており、その視点の鋭さに驚かされました。一方で、これからの「共生社会」への思いや願いも込められており、頼もしさも感じました。

特に、今回受賞された皆さんの作品は、構成や表現の仕方を工夫するだけでなく、日常から切り取られた実際の体験を具体例として示すことで、説得力があり、筆者の思いが強く感じられるものになっています。以下、最優秀賞を受賞した作品について振り返ってみたいと思います。

小学校の部の最優秀作品「安心してね、おじいちゃん」は、おじいちゃんが右半身麻痺の状態で新幹線に乗った経験から、配慮が必要な人に手を差し伸べる必要性について述べています。「ヘルプマーク」の存在を知り、そのことを市役所に電話して聞き、おじいちゃんのためにもらってくるという実際の行動をもとにした文章からは筆者の優しさが感じられます。そして、社会全体にも「ヘルプマーク」を普及させていくことで、自分の住んでいる地域を、他人を思いやることのできる社会にしていくことを訴えています。

中学校の部の最優秀作品「母のヘルプマーク」は、腎不全の母が「ヘルプマーク」をつけて電車に乗った際に席を譲ってもらった嬉しい気持ちから、少しの勇氣と優しさを持って、助けてほしいと思っている人に声をかける、手助けすることの必要性を訴えています。母の言葉や具体的な経験が綴られており、「ヘルプマーク」を周知しなくてはならないという気持ちにさせられます。困っている人のために行動することの大切さを感じることができ作品です。

高等学校の部は、優秀賞を二作品が受賞しました。高校生の優秀賞を受賞した作品は、実際の経験の中でも、障がいのある人と自分との関わりについて書かれており、相手を理解し、助け合う社会の必要性を訴えています。

以上のように、障がいのある方がよりよく過ごすことができる社会となるために、自らが障がいについて考え、意識を変え、自分にでき

ることを考えて行動しようという強い思いをうかがい知ることができました。また、文章を書くことを通して、まさに「福祉の心」を自分の中に育んだものと大変嬉しく思いました。

結びに、受賞された児童・生徒の皆さんをはじめ、作品を応募してくださった皆さん、本当にありがとうございます。また、コンクールの意義を十分に踏まえ、ご指導くださった先生方と、お子様の執筆を応援してくださったご家族の皆様に対しまして、厚く御礼を申し上げます。講評といたします。

作文応募状況

【小学生の部】

4年	5年	6年	計
36	32	48	116

【中学生の部】

1年	2年	3年	計
43	72	48	163

【高校生の部】

1年	2年	3年	計
0	11	4	15

応募総数	294
------	-----

平成三十年度「郡山市福祉の心を育成する作文コンクール」実施要項

- 一 目的
障がいに対する関心を高め、障がい者福祉を考える機会として、市内の小・中・高等学校の児童・生徒を対象に障がいに関する作文を公募し、優秀作品集を配布することにより、障がい者に対する理解を深めるとともに、児童・生徒の障がい者に対する意識の高揚を図る。
- 二 主催
郡山市
- 三 共催
郡山市教育委員会
- 四 募集対象及び部門
市内在住又は市内の学校に在学する小学生四年生から六年生まで、中学生及び高校生
(1) 小学生の部
(2) 中学生の部
(3) 高校生の部
- 五 募集作品
(1) 内容
障がいのある人と自分との関わりの中で感じたことや、障がいのある人にとっての暮らしやすいまちや福祉について考えていること等を表現した作文とするが、主題については、応募者の任意とする。
(2) 様式等
一人一点・四〇〇字詰め原稿用紙（B4判）縦書き四枚以内
- 六 応募方法
応募者は、応募票（様式1）と作文を各小・中・高等学校に提出する。小・中・高等学校は、応募者名簿（様式2）を作成の上、作文、応募票及び応募者名簿を提出する。
- 七 応募期限
(1) 児童・生徒から学校への提出期限 平成三十年八月二十八日（火）

(2) 各学校から障がい福祉課への提出期限 平成三十年九月二日(月)

八 応募先

郡山市 保健福祉部 障がい福祉課

〒九六三―八六〇― 郡山市朝日二丁目二十三番七号

TEL 九二四―三三八―

九 賞

最優秀賞三名(小学生・中学生・高校生 各一名)、優秀賞若干名、佳作若干名

十 審査

(1) 審査会

審査会の審査員は、五名以内とし、以下の者で構成する。

ア 郡山市 障がい福祉課長

イ 郡山市 学校教育推進課長より推薦された指導主事等 二名

ウ 福島県 県中教育事務所学校教育課長より推薦された指導主事 一名

エ 福祉関係者 一名

なお、審査会会長は、障がい福祉課長とする。

(2) 審査基準

優秀作品の選考に当たっては、次の基準により行うものとする。

ア 障がい福祉の心の育成の趣旨に合致していること。

イ 誰でも分かりやすいこと。

ウ 豊かな表現力であること。

エ テーマによって必要とする基準については、審査員の協議により設けることができるものとする。

十一 その他

(1) 入賞者には、賞状及び記念品を授与する。

(2) 応募者には、参加賞を授与する。

平成30年度
郡山市福祉の心を育成する作文コンクール
優秀作品集

平成30年11月

■編集・発行／郡山市保健福祉部障がい福祉課

〒963-8601

郡山市朝日一丁目23番7号

電話：024-924-2381

FAX：024-933-2290

<http://www.city.koriyama.fukushima.jp>

■印刷／郡山市

みんなの文字®

この制作物は、みんなの文字を使用しています。

みんなの文字は、一般社団法人UCDAが「読みやすさ」を認証した書体です。

